

国語

【解答例】

第1問

- 問1 ア むしょう イ 賛美 ウ もぎく エ まんざら オ 凝(つて)
- 問2 ウ
- 問3 イ
- 問4 エ
- 問5 子供の様子から普段の親の子供に対する接し方を伺い知ることができるということ。
- 問6 幼稚園には様々な環境で育ってきた友達があり、今まで家庭では使っていなかった汚い言葉を用いて話すことも、その友達との分人によつてうまくコミュニケーションを取っている一つの証と考えることができるから。
- 問7 人びとが現実の人間関係において分人を作り出す中で、誰と対応しても不変な「本当の自分」を探すことは、現実から大きく乖離して虚しく意味のないことだから。
- 問8 自分を愛するためには、他者の存在が不可欠だというのは一見矛盾しているように感じられるが、自分を肯定するための入口である分人は、他者との相互作用で作り出されるため、他者は自分を愛するために非常に重要な存在であるということ。

【採点の観点】

- 問5 「鏡Ⅱ自らを映すもの」の意味を考え、解答に反映させているか。
- 問6 「友達同士の分人化」の意味を本文から読み取り、解答に反映させているか。
- 問7 「不毛Ⅱ何の成果も得られないこと」の意味を考え、解答に反映させているか。
- 問8 「逆説Ⅱ一見真理に反するように見えて、実は一面の真理を表していること」の意味を考え、解答に反映させているか。

第2問

- 問1 ア 購入 イ 難航 ウ 負担 エ つい(やして) オ いとな(み)
- 問2 どうにもならない
- 問3 I オ II ウ
- 問4 父が本を読むことに熱情を持つばかりでなく、本が読めなくなった後も本を買い続けることで本への熱情を持続けたということ。
- 問5 エ
- 問6 人間の人生を変えるに十分な力を秘めている一つの言葉。
- 問7 本好きな父は、本を読むだけでなく読めなくなった後も、その本をいつか読みたいと願いながら読むことができない本の存在から影響を受け、読めない本との間で無言の対話を続けていた。そして、それら本との関わり全てを父は確かに幸せと感じていたという心持ち。
- 問8 父は既にこの世にいないが、私の中で文学の師のひとりとして生き続けているということ。

【採点の観点】

- 問4 「比喩」が本文でどのような意味で使われているかを読み取り、解答に反映させているか。
- 問6 傍線部の前に書かれている指示語の内容を読み取り、解答に反映させているか。
- 問7 父の遺した蔵書の前で福原麟太郎の言葉を思い出した時の筆者の心持ちを読み取り、解答に反映させているか。
- 問8 既に「死者」となった父が筆者の中で生き続けているとはどういうことを考え、解答に反映させているか。